

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

不空訳『仏母大孔雀明王経』の音訳漢字に関する音韻学的研究

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Hashimoto, Takako メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1363

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



2. 博士論文審査の要旨

本論文は漢字で音写された資料から、当該の時代の漢字音について研究するにあたり十分な量を有し、かつ信頼できるテキストの存在する不空（705-774）訳『仏母大孔雀明王経』を対象に、そこに現れる陀羅尼を網羅的に収集し、予め校本を作成した上で、音訳漢字に関する音韻学的研究を行ったものである。纏まった量の均質なデータを分析することにより、時代、地点の面でのパラメータを最小限にした上で、同時代資料を勘案し、音韻体系を推定した。また同時に、先行研究についても広い範囲で目を通し、定説とされる主張にも十分な客観的根拠を持って理論的に批判を加えている。

従来の梵漢対音の研究は結果だけの提示というものが多く、他の者が原資料に当たって確認するのが困難であるという場合も少なくなかったが、本論文は研究篇、資料篇と2部構成になっており、テキストクリティークの詳細も知ることができる。一つの梵漢対音の文献研究のスタンダードを提示するものとして、公刊されれば今後の中国音韻学研究に益するところ大であり、また仏教研究とりわけ陀羅尼研究にも資するものであることを言を俟たない。

対象とした文献が他の梵漢対音資料に比べ圧倒的に多いデータを有するものであるにせよ、インド側の言語の音韻体系上の制約により、中国語音韻体系の細部の隅々までを十全に反映するまでには至らないというところから、同文献に反映する中国語音韻体系の再構にはなお不確実な部分が残るが、これはあくまでも資料的制約によるものであって、決して筆者の力不足を意味するのではない。

本審査委員会では審査を踏まえた協議の結果、本論文について高い評価に値するとの合意に達した。

論文審査結果

中国語音韻史の資料として有力なものとしては梵漢対音がある。この梵漢対音の研究には中国、インド双方の側の方言的要素を考慮せねばならない上に、伝承の際の誤写、書き換えや学統の違いなども考慮せねばならず、多大の困難を克服する必要があるため、従来より研究の必要性は叫ばれながらも、現在に至るまで従事する者は少ない。そしてそのために先行研究についても十分な検証が行われないままに受け入れられてきたようなところがある。論文執筆者の橋本貴子氏はサンスクリットについて十分な知識を有し、現代の方言も含め、インドアーリア系言語の地域的差異にも目を配っている。また中国語音韻史の知識も十分に有しており、この方面の研究を行うのに十分な能力を有している。

橋本氏はこれまでにトルファン出土のウイグル漢字音資料や慧琳音義の陀羅尼の音訳漢字についての研究を行って、対音資料研究の経験を積んできた。サンスクリットの学習も進め、インド側の言語についての知識も増やした上で、纏まった量があり、しかも後人の手が殆ど入っていないと思われる不空（705-774）訳『仏母大孔雀明王経』（以下、『孔雀経』と略）を対象に選び、そこに現れる陀羅尼の網羅的な調査分析を行い、本論文を執筆した。研究は異本の

対照、校本の作成から始め、悉曇文字の転写と原語の同定、中国語音との対応状況を検討した上で、サンスクリット音の分析を進め、中国語音韻体系の再構を行っている。

論文は研究篇と資料篇の2部から成り、内容の構成、概要は以下の通り。

【研究編】

第1章「序論」

第1章、本研究の目的、先行研究、研究方法について。

第1節では、本研究の目的が不空訳の音訳漢字に反映される(1)唐代音と(2)Sanskrit (以下、Skt)音の特徴を明らかにする点にあることを提示。第2節では、不空訳の音訳漢字に関する主な先行研究として、H. Maspero 氏、羅常培氏、水谷真成氏、劉広和氏の論考を挙げ、それぞれの内容の概要と問題点を整理。第3節では、従来の研究の問題点を克服するために、対象を『孔雀経』の音訳漢字に限定して精査する、という方法を採用することについて説明。

第2章「資料について」

第2章では、不空訳『孔雀経』、使用テキスト、音訳漢字の抽出方法について説明。

第1節では、訳者である不空の経歴及び不空の訳場組織の概要について述べる。不空の Skt 音がインドの特定の地域のものであると予め仮定するのは難しいこと、音訳は訳主である不空自身が行ったのではなく、担当者が実際の作業を行ったと考えられることを指摘。

第2節では、本研究で使用する東京大学国語研究室所蔵本（以下、東大本）及び参照する他本の性質について紹介。東大本の音訳漢字は、『三十帖策子』第15帖所収本との間で異同が少ないことから、相対的に見て後人の改訂がほとんど加えられておらず、訳出から、訳出当時の状態に比較的近いと考えられる。また、東大本の陀羅尼部分には音訳漢字の傍らに対応する Skt が悉曇文字で併記されている。この悉曇文字で表記された Skt には、字形の類似に起因する誤写が多く含まれているので、それら誤写の処理方法について説明を加える。

第3節では、音訳漢字と Skt との対応範囲を確定させる際の基本的な考え方について述べる。

第4節では、音訳漢字の分類方法について述べる。分類の具体的な状況については、資料編「音訳漢字・Skt 対応一覧」に網羅されている。

第3章「音韻学的研究」

第3章では、『孔雀経』の音訳漢字と Skt との対応関係から、音訳漢字に反映される唐代音と Skt 音の特徴について検討を加える。その際、不空の活動時期に近い時期に成立した、他の漢語音韻史資料（慧琳『一切経音義』の反切、日本漢音、チベット対音資料、ソグド文字資料、漢訳マニ教文献の音訳漢字）や Skt 音に関する研究・資料に言及することがある。この章の冒頭では、それらの研究・資料について紹介する。

第1節では、漢語の声母と Skt の子音について検討する。

漢語側の特徴としては、軽唇音化、全濁音の有気音化、次濁鼻音の非鼻音化が認められる。同時期の他の資料は全濁音の無声化の反映が見られるが、『孔雀経』では全濁音の完全な無声

化はまだ起きていない。そこで、8世紀の長安音では、全濁音が入り渡りの部分が無声化し、有声性は出渡りの気音部分に保存されていたとの考えを示す。Maspero氏が指摘した、鼻音韻尾を有する音節において次濁鼻音の非鼻音化が妨げられる傾向が、『孔雀経』の音訳漢字においてあまり明瞭に現れないのは、資料的性質によるものであることを指摘する。そして、この問題については、外国語で漢語を表記した資料の反映に基づいて、Maspero氏の説が概ね有効であると述べる。Sktの有声無気音と鼻音に対する音訳は、従来インド側の方言的特徴の反映と考えられたことがあるが、肥爪周二氏による検証およびSkt音を外国語で写した資料の反映に基づいて、インド側ではなく、漢語側の方言的特徴と考えるのが妥当であるとの考えを示す。また、k kh g ghを牙音3等B・C類の字で音訳する傾向についても、従来Skt側の問題と考えられることがあったが、むしろ漢語側の牙音3等B・C類の性質に起因している可能性が高いことを指摘する。

Skt側の特殊な反映としては、c ch j jhの歯音的な調音傾向、子音連続 jñ、kṣ、tsに見られる方言的特徴を挙げることができる。

第2節では、漢語の韻母とSktの母音等について検討。

Sktの母音は、漢語と比べて種類が少ないので、音訳漢字から漢語の韻母について得ることのできる情報は余り多くない。介音については、3等A類の字がi、ɿを含む音節の音訳に用いられるが、重紐の対立は臻撰に見られる程度である。鼻音韻尾-m、-n、-ŋの区別、入声韻尾-p、-t、-kの区別は保たれている。音訳漢字では、宕・梗撰舒声の鼻音韻尾の存在が次濁鼻音の場合に確認できない。この点については、-ŋ韻尾の弱化を反映している可能性もあるが、他の対音資料における反映を参考に、鼻音韻尾の影響で声母の鼻音性が保たれるのを音訳に利用したものとする。-t入声は時折単独でSktのrやdを表すことがあり、他の同時代資料においても、漢語の-t入声で外国語のr、l、dを写したり、逆に外国語のrで漢語の-t入声を表記することがあるので、特に-t入声の場合は閉鎖が緩かったと考える。

Skt側においては、流音母音 r̥ r̄ ! !̄ が [ɹ] や [ʁ] のような音で読まれていた可能性、m̄ が語末において必ずしも次の語句の語頭の子音に同化せず、しばしば [n] や [m] のように発音されていた可能性について指摘する。

第4章「結論」

第4章では、第3章において検討した内容を踏まえ、『孔雀経』の音訳漢字が反映する唐代音、Skt音の双方について総合的に論じる。

第1節では、音訳漢字に反映される唐代音には、特に声母と韻尾の子音に関して、西北方言の音声的特徴が見られる一方、中古音と同様の保守的特徴も見られることについて述べる。

そして、それらの特徴に対する総合的な解釈として、『孔雀経』の音訳漢字が反映する8世紀の長安音では、声母および韻尾の子音の体系は中古音の枠組みを保持していたが、具体的な音価においては西北方言という基層の影響によって、中古音とは異なる音声的特徴が現れていたとの考えを示す。

第2節では、音訳漢字に反映される Skt 音の方言的特徴について、不空の出身地や経歴に関する情報には不確定な要素が多いこと、北インドに限定される特徴とは言えないこと、不空の師である金剛智からの継承性についても調査する必要があることから、現段階ではいずれの地域の発音であったのかについて、明確な答えを出すことはできないとする。

最後に第3節では、本研究のまとめとして、本研究で行った幾つかの新たな指摘が、『孔雀経』の訳出時期に比較的近い時期の資料を複数利用できたことによること、それら資料が反映する漢語音、Skt 音の同質性の問題について言及する。そして、今後は漢語、Skt 双方の方言差や時代差、学派の違いについて更なる検討を行うために、不空訳以外の音訳漢字についても詳しい調査を行っていく必要があることを述べる。

【資料編】

資料編は「東京大学国語学研究室蔵『仏母大孔雀明王経』陀羅尼テキスト及び校異」と「音訳漢字・Skt 対応一覧」よりなる。

「東京大学国語学研究室蔵『仏母大孔雀明王経』陀羅尼テキスト及び校異」

東大本の陀羅尼部分を翻刻し、他本における異同の状況を明らかにしたもの。

「音訳漢字・Skt 対応一覧」

各音訳漢字が対応する Skt 音、出現回数、各出現箇所における Skt との対応等について、整理、分類したもの。

(以上、構成、概要の紹介)

『孔雀経』は後人の手が入らない古いテキストが存在するにせよ、特に悉曇文字には多くの誤写が見られる。それ故、校本作成にはかなりの時間がかかる。橋本氏は諸本を吟味の上で東大本を底本とし、他本と比較対照して校本を作成、悉曇文字をローマ字転写した上で、そこに現われる音訳漢字とともに網羅的に抽出し、インド、中国双方の方言的要素を斟酌した上で、当時の漢語の音韻体系について体系的考察を試みている。転写に当たっても、先行研究の事例を踏まえつつ、インド側の方言的差異を考慮の上で原文の誤りを正し、原語の同定を行っている。橋本氏のこの校本作成の基礎作業に見られる厳密な態度は高く評価でき、そしてその成果である校本もまた大いに信頼できる。

このような作業の上で、先行研究にも批判的な検証を加えている。いわゆる次濁鼻音の非鼻音化現象の発生時期についての見解はそのうちの一つである。先行研究の把握について、細かなところで二、三の言及漏れはあったものの、概ねしっかりなされている。

インドの言語では音韻体系上の制約から、漢語の韻母の細かい特徴を表しきれないという問題があり、特に韻母体系の研究に就いては資料的制約の存在を否認しない。またデータの量から見ても、陀羅尼に用いられる音訳漢字自体がそもそも漢語の音韻体系の諸要素を全て表すべく意図して用いられている訳ではない。従って『孔雀経』の陀羅尼の音訳漢字だけからそこ

に反映する漢語の音韻体系を完璧に再構することは不可能である。そのような制約の中でも所与のデータを注意深く分析することで、梗撰などの唐代西北方言の要素を論じ、興味深い見解を提示している。声母体系についても緻密な分析により、新知見を提示している。特に上で触れた非鼻音化の時期についての主張は、そのうちの一つである。また声調についても、上声、去声についての所説に見るべきものがあった。『孔雀経』の陀羅尼から知りえない部分については、同時代資料を検討し、それらとの整合性を考慮することで、独自の推定を行っており、その推定の姿勢は慎重であって、得られた結果は十分に妥当なものであると言える。

音韻研究の面では手つかずであった大部の文献に果敢に挑戦し、地味で時間のかかる研究を見事に完成させたことを高く評価できる。今後、この研究は斯界の一つの典型例として認められることになるであろう。

最終試験結果

〔試験実施 2012年1月17日〕

最終試験は2012年1月17日午後3時から、本学三木記念会館で実施され、太田斎（主査）、武内紹人、竹越孝の3名の本学教員と古屋昭弘（早稲田大学教授）、吉田豊（京都大学文学研究科教授）の2名の学外審査委員の計5名により、公開審査の形式で行われた。

最初に学位申請者が論文要旨を紹介、引き続き審査委員5名との間で質疑応答が行われた。

審査委員からは一様に校本作成の精密な作業について積極的に評価するとの指摘があった。

中古音の音節総数に比べ、『孔雀経』より抽出される音訳漢字の総異なり数はその十分の一程度の音節数（346）に留まり、中古音の再構には量的に不十分ではないかとの疑問が呈されたが、対音資料に反映するデータの量は非常に限られたものであるのが普通で、一テキストから抽出できる量としてはこの音節数は他に例を見ないほどの多さであるとの意見もあり、データの量の制約は橋本氏の研究の価値を否定するものではない。

博士論文としては規模も十分であり、研究に必要な知識も備わっていることが見て取れ、そこに盛り込まれた知見も十分評価できるとの意見があった。

形式的な面では構成にもう少し工夫が必要であるとか校本に索引があるべきだとの指摘があったが、致命的な欠陥とは言えず、一方で速やかに公刊すべきだとの積極的な意見もあったことを付け加えておきたい。

質疑応答に当って、橋本氏は審査委員の質問、意見に対し終始的確な答弁をしていた。

公開審査終了後、審査委員は別室で協議を行った。本論文が博士論文として認めるに十分なレベルに達しているとの合意が得られ、最終試験評価を「合格」とした。